UrbanDesignLab.Magazine

2014.09.30 vol. 221

学会発表の価値とは

THE VALUE OF CONFERENCE PRESENTATIONS

空間実現のツールを探る
D1 児玉、優秀修士論文賞受賞！ p.2
2014 年度日本建築学会大会 in 神戸 開催！ p.4

東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/

編集長： 高梨 遼太朗
編集委員：道喜 開視 原 由希子 柄澤 薫冬
柴田 純花 中村 奈菜美 益邑 明伸

▲名古屋市条例に従い 2m 近く盛土された住宅地

空間実現のツールを探る　D1 児玉、優秀修士論文賞受賞！

Exploring the tools of spatial realization

D1 Kodama received award for her master thesis

昨年度修士を修了した D1 児玉が日本建築学会の優秀修士論文賞を受賞し、9 月 12 日（金）に建築学会大会にて表彰式が行われました。児玉さんの修士論文は、災害リスクの高い土地への開発コントロール手法の１つとして災害危険区域制度を取り上げ、その制度的源流を明らかにするとともに、理念および実践上の課題を明らかにしました。事例として、伊勢湾台風以降半世紀にわたって実際に災害危険区域を設定し続けている名古屋市条例に着目し、その長期経過を追うことで制度上のジレンマを述べた明確な論旨が評価されました。また、人口減少社会における防災性と市街地再編をかね合わせた都市計画手法の１つとして災害危険区域を捉え直すという観点から基礎的な資料を提供しているという意味でも、将来性を高く評価されました。

▲建築学会の授賞式にて

今回は修士論文のテーマの選定理由や苦労など論文執筆の過程について伺います。

＊

ーまずは受賞の感想をお願いします。

先生方をはじめ沢山の方に御指導・御協力頂いたので、皆さんの御恩に少しは報いることができたかなとほっとしています。正直、かなり稚拙な、未熟な論文で、直前まで全く仕上がらず、論文賞に応募する意味なんか無いんじゃんと思いながら郵送したので…そんな読みづらいものを精読してくださった審査員の皆様にも、頭がさがる思いです…正直恐縮です…。

ー昨年度の研究室会議では、研究テーマについて悩んでいるようでしたが、それでもすでに何か着眼点を持たれているように感じました。どのようにそれを見つけたのでしょうか？

最初のきっかけは、M1 冬に履修した復興デザイン研究体スタジオのスピンオフ企画で災害危険区域見学会（@陸前高田市・大槌町）に参加し、防災集団移転促進事業と災害危険区域指定について調べたのが始まりでした。

私は元来地形萌え派というか、都市・地域空間が地理的な条件に素直に従うととても魅力的になると感じていて、そういう地理的な条件をうまく使った空間をみつけるのが大好きでした。ただ、現代都市は技術力でほとんどの地理的条件を表面上克服しています。低湿地は埋立て、ポンプ排水して開発するし、台地にも加圧送水で水道を通す、崖は切って固める、谷はトンネルでつなぐ、浅い海は浚渫する。環境保護主義者ではないので、それを盲目的に悪と見なすわけではありません。ただ、これらは地理的な条件を表面上見えづらくしています。土地のユニー

クさは「条件不利」という克服すべき対象と見做されて地域の文脈から切り離され、国や地域外主体からの外部資本で投資・開発され、日本全国隈なく発展してきたのだと思います。

東日本大震災以降かなり理解され易くなりましたが、災害リスクの高いところから市街地を縮退させるというのは人口減少下の集約型都市実現手段としてあり得ると思います。でも土地所有者がいる以上制度運用上は困難が多いですし、リスク低減の経済的・精神的コストを誰が負担するのか、国か、地域か、個人か、という問題は東日本大震災の被災地でも答えが出ていません。その中で、災害危険区域制度は「国はやらないので、地域で決めてくれ」ということを当初から謳っていて「全国隈なく発展させる」という前世紀の国の姿勢とは矛盾している。ここに疑問を感じて、詳細を調べることになりました。

ーまた、途中からテーマが変わったようでしたが、それはどうしてでしょうか？

都市計画の専門性ってそもそも何かなって考えると、空間を実現する手段から離れては存在し得ないと思うんです。だから、研究では空間像そのものではなくて、空間を実現する手段、そのツールや仕組みを対象にしたいと考えてきました。どういうシステムの中で、どういう主体が意識的もしくは無意識的に行動し、どういう空間になるのか。そういう意味で、何か特定の空間に興味があるわけではなく、あくまでも空間を実現するためのツールを探していたこともあって、研究テーマは二転三転しました。

ちなみに災害危険区域制度は、そういう主体が従うシステムが不在だったことで、都市地域空間をうまくコントロールできなかった。実際には、保険制度など新しい仕組みを導入して変えていく必要があるのだと思いますし、研究でもそういう提案までできれば万々歳だったのですが、そこまではできなくて…とりあえず現時点での既存制度の問題点を指摘するという体裁になりました。

ー修士論文を仕上げるにあたってどのようにモチベーションを維持したのでしょうか？また、苦労したところを聞かせてください。

M2 春に都市計画論文集に投稿し秋大会で様々な方から意見を頂けたのが大きかったです。見ず知らずの方がこの論文に興味を持ってくださったことがすっごく嬉しくて、責任をもってこのテーマを書き上げようと思うことができました。

初めて論文を書いたので、調査計画や資料管理など、初歩的なノウハウも無くて、ずっと苦しかったです。インタビューのアポイントメントを取るのもスムーズにいかなかったし、タウンページから電話かけてみたり、連絡は取れてもなあなあに躱されたり。そんなの当然のことですけど、時間がないと心の余裕がなく本当にもうやめたいなあって思うことが沢山ありました。でも先生方や周囲の人を巻き込んでしまった以上自分が諦めるわけにはいかないというか、むしろ退路を断つために人を巻き込んだというか…惜しみなく協力してくださる方を裏切るわけにはいかないと思いながら執筆してました。

ーまだ修士論文を書いたことのない後輩達に向けて、論文を書く上で児玉さんなりに気をつけたことはありますか？

皆さんも都市とか空間のことを考えるのが好きで都市工にいると思いますが、普段そういう話をするのって同期の友人や身近な先生方とかがほとんどなのではないかと思います。話が通じると嬉しいし、通じないとちょっとがっかりすると

▲普段見過ごしていた名古屋港基準面の電柱標示

▲返送されてきた住民アンケートに感激。
郵便局の後納担当者の方にも感謝…。

いうか…。私は修士の間に学会で発表することで、その外側の世界というか、自分の身近なところ以外にも投げかければ通じるんだっていう感触を得て、すごく視界が開けた気がしました。皆さんも、アイデアをどんどん外に出して、先生や友人だけでなく早い段階で外部の方と意見交換していくと、くよくよせずに次へ次へと進めるのではないかと思います（笑）。当たり前のことかもしれないけど、私は学部で研究しなかったこともあって、そういう感覚に気づくのが遅かったので、それまで勿体無い時間を過ごしたなと思っています。

ー博士課程に進学されて、これからの研究はどのような方針で進めていくのでしょうか？

災害以外の観点からも人口減少期の市街地再編について考えたいと思っています。インフラの維持管理等にも地理的な条件というのは決定的な影響を与えているし、歴史的な文脈の中には必ず地理的な条件が絡んでいる。どういう空間を、どういう手段で実現するか、空間像とツールの両方をつなげて論じることができればと思っています。

ただ、修士課程でも、どんな論文になるのか全く見通せていませんでした。災害危険区域で書くと決めたのも M2 の 12 月なので、ほぼずっとふらふらーふわふわーっとしてました（笑）。博士課程でもどうなるかわかりません。もちろん計画的に進めたいんですが、目に触れるいろんなものを柔軟に吸収しながら…というと都合が良すぎる響きがするので言い換えると、心を開いてというんでしょうか、いわゆる sense of wonder を持ち続けて、出会うものに心を動かされながら博士課程を過ごしていきたいです。■

2014年度日本建築学会大会 in 神戸 開催！

Architectural Institute of Japan Annual Meeting 2014 in Kobe

9月12日（金）から14日（日）まで神戸大学にて2014年度日本建築学会大会（近畿）が開催されました。阪神淡路大震災からおよそ20年という神戸で行われた今回の大会には研究室から現在のメンバーやOBOGが参加し、個人の研究成果を発表しました。また、毎年恒例となっている懇親会も行われ、お互いの研究や近況について様々な会話が交わされました。その中で、13日（土）に発表を行ったM1李に発表した論文の内容や実際に発表をした感想を聞きました。

発表者一覧（敬称略）

発表者	題目
永井ふみ	住環境の価値を維持保全する主体の形成を実現するための計画技術について ―次世代郊外まちづくり「住民創発プロジェクト」を対象に―
李美沙	地域密着型不動産企業のコミュニティビジネスの実態に関する研究－大里綜合管理(株)を対象として－
羽野明帆	神田における老舗集積の立地要因と役割－旧連雀町・佐柄木町地域の老舗に着目して－
森朋子	ネパール・ルンビニにおける世界遺産登録を契機とした文化遺産保全の実態と展望 －アジアの途上国における文化遺産保全に関する研究－
宋知苑	歴史的建造物保存における本来の用途・再生後の用途と「体験価値」の関係について －米国ニューヨークJohn F. Kennedy国際空港TWAターミナルを事例に－
田中暁子	ブリュッセルのグラン・プラスにおけるコミューン都市計画規則による屋外広告物コントロール
江口久美	ブザンソン市における住民諮問委員会の活動に関する研究－トラムプロジェクトを対象として－
西川亮	文化庁「歴史の道」事業に関する研究

M1: 李美沙

建築学会大会に参加して

今年の建築学会大会で卒業論文を発表し、厳かな雰囲気にかなり緊張しましたが、とても良い経験だったと思います。

卒業論文では、千葉県大網白里市にある大里綜合管理㈱という不動産会社を事例に、地域密着型企業によるコミュニティビジネスの実態に関する調査を行いました。ここは、不動産業を主として営みながら、10年以上継続して地域貢献活動を行っている所で、社屋を一般に開放しながら活動している点が特徴的な会社です。例えば、駅前の交通整理、トイレ掃除、地域の主婦の方々による日替りランチのレストラン経営、地域の人が先生になるカルチャー教室の運営等々、調査当時に実施中の事業は計91事業ありました。ここで様々な活動の運営に参加させていただきながら、ヒアリング、アンケート調査、空間利用実態調査を行いました。

質問はなく、思っていたよりもあっさりと終わってしまいましたが、発表後に似た事例を教えて下さる親切な方がいて、学会はそういった同じ分野の研究をしている人との情報交換や繋がりのできる場なのだと実感しました。また、私の後に発表していた方で、ヒアリングすること自体も難しいような海外の人々を対象に研究をしている方がいたのですが、研究に対する熱意が発表から感じられて、とても良い刺激になりました。もしまた発表する機会ができれば、受け身な姿勢でいるばかりではないように心がけたいです。

▲神戸大学から見た神戸の街並み

information

9月のウェブ記事

帯の幅ほどある町を
編集長のデトロイト渡航記

是非ご覧下さい：http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

10月の予定

10日6日	神田勉強会
10月10日～12日	佐原秋の大祭
10月12日	ミナトブンカサイ2014
10月17日	第5回研究室会議
10月24日	研究室OBによる設計事務所の会

表紙写真：左から神戸港、神戸ムスリムモスク、メディテラス、ヨドコウ迎賓館
提供：D2宋

編集後記

道喜 開視

研究室旅行で中国の上海と杭州に行って参りました。杭州ではOGのシュウランさんを始めとする、浙江大学の学生達に案内をして頂いたのですが、中には日本のことが大好きで日本のバラエティ番組をよく見るという学生がいました。彼にアンジャッシュ（芸人）のすれ違いコントを紹介してもらったのですが、10フレーズぐらいを正確に覚えており、その好奇心と記憶力にとても驚きました。中国では咳風邪をひいている人もいましたが、日本人も日本のお笑いで笑って、元気になりましょう。笑門来福。